

『続の原』

不卜の第三撰集。貞享五年（一六八八）序刊。半紙本二冊。上巻は句合、下巻は歌仙と諸家発句。句合は、春・夏・冬が二番、秋が一夏の計四七番。判者は、春・素堂、夏・調和、秋・湖春、冬・桃青（芭蕉）が担当。今回とりあげる芭蕉の判詞は、貞享四年の冬に書かれたものである。

本文

一番

左持 落葉

落つかぬ木の葉にあたる霽哉

風水

右

落葉とて富士のつゞきに塔ひとつ

松濤

左りの句、景気微細に心を付たり。
右又、山もあらはなるふじの詠め、一句のたけもゆたかに聞え侍る。されども句中、目に見えたる切字なし。五文字にて云残したれば、きれ字をくはへて見るべきにや。なを分明ならざるを難じて持に定侍るべきか。

現代語訳

左持（引き分け） 落葉

はらはらと散って落ち着かない様の木ノ葉。その落葉に梢から落ちる霽があたる音が聞える。

* 木の葉は、枝についている状態では雑（『俳諧御傘』など）。「落葉」という季題で読まれているので、散っている様であることがわかるが、散りゆく様であるとも、散り落ちてかさかさ動く様であるとも、どちらともとれる。

右

木々は葉を落とし、遠くまで見渡せるようになった。遙か向こうの富士の続きに寺院の塔が一つ見え、それぞれに高さを際立たせている。

* 「塔」はお寺の塔。漢詩題ともなっている（『円機活法』）。高さをイメージして詠まれることが多い。

(判詞)

左の句は景色の美しさのごく細部に目をとめて詠んでいる。右もまた、和歌にもいう「山もあらは」な様の富士の美しい眺めを詠み、句の品格もゆったりとのびのびしていると感じられる。けれども、句の中にはつきりとした切字がない。(上の(五文字で)とて「とうふうに(言い残したので、ここに切字を加えて)＝切れがあると考えて(読むべきだろうか。やはりはつきりしないという点に難があるので、引き分けとするべきである)うか。

* 「微細」「分明」は、『日葡辞書』『書言字考節用集』などによつて、「ミサイ」「フンミヨウ」と読む。

「山もあらは」は、『新古今集』の「冬のきて山もあらはに木の葉ふりのこる松さへ峰にさびしき」をふまえた表現であるが、歌が山の木々が葉を落とした様であるのに対し、句は近景の木々が葉を落として、遠景の富士や塔がよく見える様を詠んでおり、意味を転じて用いている。

また、切字そのものの有無について問題になっているともとれるが、各目の「切字」の有無にこだわらない芭蕉の切字観はよく知られている。既に貞享二年に、「辛崎の松は花より靡にて」「の吟が芭蕉にあり、(こ)も」「切字」「とは言っているものの、」「切れ」について問題になっていると考えた方がよいように思う。

なお、右の解釈では切れを上五にあるとして訳したが、中七にあるとする意見もあった。傾聴すべきと思われるが、とりあえずこのままでおく。

本文

一番

左勝 霜

親と子の霜夜をかこふ野馬のうま哉

溪石

右

霜ふかし扇をかざす夜の舟

勇招

「ものいはぬよものけだものすらさへも

あはれなるかなや親の子をおもふ」

とよみたまひしこのうたたよりに便し

て、野馬の子をいとふさませつなり。

右の句、さもあるべきながら、左の句

秀逸なれば、まけ侍らむかし。

現代語訳

左勝 霜

親と子の野馬が、霜夜の寒さからお互いを守るように身を寄せ合っている。

* 「霜夜」は霜のおりた寒い夜。「かこふ」は外の力が及ばないように周囲をふさぐことから、守りかばう意となる。「野馬」は放し飼いにしている馬。囲われてはいない野馬の親が、寒さのためお互いを「かこふ」としたところに、表現上のおもしろさがある。なお、「霜」は初冬十月のものとして扱われる。

右

霜が深くおりにている。その冷たさに対して、夜舟の中で扇をかざしている。

* 「霜ふかし」は和歌・連歌・俳諧を通じて散見され、ここは霜夜のしんしんとした寒さの表現。「扇をかざす」は光や視線などを避け扇で顔を遮ること。「あつき日や扇をかざす手のほそり 印苔」(『続猿蓑』)のように、暑い日に行うのが一般で、それを霜夜の行為としたところが作者の工夫。「霜」と「月」はお互いを見立てにも用いることから、ここも、月光に対してかざす扇を霜に対してお互いを見立てた趣向した、と見てよいかもしれない。「夜舟」は夜間運河の乗合舟で、「淀にて／はつしもに何とおよるぞ船の中 其角」(『猿蓑』)などに通う情が認められる。一方、漢詩「楓橋夜泊」の影響を想定すれば、停泊した舟の中と見ることもできる。なお、季吟は『山之井』で「霜」の詠み方を解説し、「霜夜はことに空さえて、月の光りもさむけだち、風もみのいりて、ねびえお

どろく心ばへ」と記している。

(判詞)

「物いはぬ四方のけだものすらさへも哀れなるかなや親の子を思ふ」と(実朝が)お詠みになった、この歌をよりどころに読むと、野馬(の親)の子をいたわる姿が、切実なものとして迫ってくる。右の句も、そんなこともあるだろうと思わせるものながら、左の句がきわめてすぐれているので、負けであるだろうね。

* 「ものいはぬ…」は「慈悲のころを」の前書をもつ源実朝の歌で、『金槐和歌集』では第三句が「すらだにも」。果たして、芭蕉はこれを左句の典拠として指摘したのか、どうか。当時、この歌が広く流布していたとは言い切れないことから、典拠の指摘ではなく、句から想起したのがこの歌である、と理解しておきたい。「便して」は手がかりにしての意で、ここでは芭蕉がその主体ということになる。

「せつなり」は、深く切実な様子であることや、そのような情がこもっていることに対していう語。「深切なり」と同義の語であると見てよく、「深切」は天和期前後の芭蕉を考える際の、鍵となる語の一つ、たとえば、『俳諧合』「田舎」五番の判詞で、「左 徳利狂人いたはしや花ゆへに社／右 桜狩けふは目黒のしるべせよ」に対し、次のように記している。

徳利をいだいて花にたはぶる狂人、深切也。又、目黒が原の遠のさくら、尤やさし。上野・谷中のさくらを見つくしたる体、言葉の外にあらはれたり。両句、幽玄、差別なし。

「さもあるべし」も判詞に使われる語で、『俳諧合』「田舎」十三番では、「左袖の露も羽二重気にはぬぬもの也／右 夢と成し骸骨踊る萩の声」に対し、

羽二重の袖の露は、「貴人の心に秋至らず」と作れる詩の心を思ひよせられたるにや。右また、骸骨の萩の声をかりたる、さもあるべき事ながら、左の感浅からず覚え侍る。

とあり、芭蕉の場合、一応は認めながら、相対的に負けと判定する際に用いていることが、ここでも確認できる。

「秀逸」もまた判詞に多用される語で、やはり『俳諧合』における芭蕉判詞の中にも見られる(例示は省略)。では、右の句を退け、左の句を「秀逸」とした理由は何か。第一に、霜夜の寒さから身を守る点で、両句は共通するもの、右が自分のための行為であるのに対して、左は親子のかばい合う姿をとらえている点。実朝歌を髣髴させることも含めて、そこに「せつなり」と感じさせるものがあるといえよう。第二に、どちらにも観念的で言葉遊びに通じる側面はあるものの、左の「かこふ」ではそれが句の背後に隠れ、一句として自然な情景句ともなっているのに対し、左の「霜…扇をかざす」にはそれが露骨であるという点。ここに芭蕉のめざす方向が垣間見られるのだと思われる。

本文

三番

左 持 夜興

我笠わがに月夜忘るかなゝ夜興哉

右

いづれ狸得失覚さまて犬もなし 文鱗

ひだりの句、茂みふかく分入わけいるかりごと狩人の

形容いぶかしき所有あり。

右の句も、すがたつよく言葉も

たくみにきこえ侍れども、其得失その、

我もわきがたし。仍以よつてもつて持トス。

現代語訳

左 持(引き分け) 夜興

我が笠が月の光を遮って、皎々と冬の山間を照らす月夜であることを忘れてしまった、いかにも獲物を待つて茂みにじつと身を潜めている夜興らしいではないか。

* 「夜興」は、「夜興引」ともいい、冬十月の季題。『毛吹草』「誹諧四季之詞」にあるように、俳諧において詠まれるようになった季題である。冬の夜、獵師が犬を引いて山に入り、狸・狐などの獣を捕ることをいう。時代は下るが『類從名物考』によれば、近畿地方の方言といい、また享保二年に出た『書言字考節用集』には「獵師ノ用いる所」と注があるので、獵師言葉が一般化したものとしてよいであろう。「夜興」の題では、狩に伴った犬や獵師の狩りをする体を詠むことが多い。求め得た例は、寛文末から延宝期のもものが中心であるが、それらは、狩に伴う犬の様子を詠んだ句が多い。

冬山の眠やおこす夜興のいぬ 高瀧以仙

狩人や罪もむくいぬ夜興引 藤田清俊

夜興の犬やふるきをたつねて狸穴 吉田聞也(延宝2)『桜川』冬2「夜興引」

夜興／夜興ひく盗人犬や龍田山 其角 (延宝9)『東日記』坤「冬の部」

犬引ひいてと豆ふ腐狩得かりたり里夜興 其角 (天和3)『虚栗』上冬

『虚栗』所収、其角の句は、犬を連れて豆腐を買ったことをことさら夜興めかして言い立てた趣向である。また、「よこ引や山又山に山めぐり 政氏」(延宝7)『詞林金玉集』一四)のように、狩人が山を廻るさまを詠んだ句も散見されるが、中でも次の二句は左句の趣向と関係が深い。

三ヶ月に思ひまどろむ夜興哉 拳白(貞享2)『ひとつ星』

横引夜興の背子勢にも立か今日の月 紫道(元文2)『ひとつ餅』

明け方に出る下弦の三日月に、思わず眠りを催すと詠んだ拳白の句、『続の原』よりもずいぶん後の例ではあるが、月を勢子(鳥獣を狩り出し、縄や板などをもつ

て射手の方へ追い込む者」とみる紫道の例など、夜興に月を詠む趣向は、「夜興」の詠み方の一つとして自然な着想であったのである。そういえば、去来が芭蕉は夜興引について知らないだろうと勘違いして、狩の獲物となる猪が戻ってくるのを待つ夜興のことを芭蕉に説明したというエピソードが『去来抄』に載っているが、その句も「猪のねに行かたや明の月 去来」という月を取り合わせた句であった。

* この句、「夜興」と「月」との取り合わせは、右に見たように自然な着想であるが、一句はそれを自分の笠が頭上を覆っていて、月夜であることを忘れていたとして、新しい作意を月との関係に見出そうとした詠であろう。芭蕉の「命なりわづかの笠の下涼み」(延宝4『江戸広小路』)の句があることを思えば、我が顔の部分ばかりは月が射し来ず、闇にいとまでは、言えよう。しかし、冬の月は、木の葉も落ち尽くした山を皎々と明るく照らし出している(『和歌題林抄』)。それを笠を被っているゆえに「月夜」だと忘れていたとは、巧みすぎた詠ということにならう。

右

いったいどの狸が得たろうかと、その得失に夢中になった狩からふと我に返ってみると、狸どころか、連れてきた大切な犬さえどこにも居なくなってしまったことだ。

* 「いづれ」とは、例えば「いづれうは葉下荻の露あらし哉 周桂」(『発句帳』)のように、複数の中から一つを選択する文脈において用いられる。したがって「いづれ狸」とは、どの狸を捕ろうかと得失に夢中になっている様を言ったものと解せよう。その得失に夢中になった狩から覚めてみれば、犬もどこにもいない、というのである。なお、「犬」と「狸」は、例えば「犬たでやかみつく膳の狸汁 徳元」(『塵塚俳諧集』)、あるいは時代が下るが「犬にとられし狸わりなき 銀獅」(『羽織着て』五十韻『新雑談集』)と詠まれるように、犬が追い立てて狸を捕る狩の様子を自ずから表している。こども、獺の「犬」と「狸」を詠んだところが、題「夜興」を廻して詠む形になっている。

「犬もなし」の「もなし」については、山根清隆氏に連歌の用例についての詳細な分析がある(『心敬の表現論 桜楓社、昭58』)。俳諧においての「もなし」は連歌と同列には扱えないが、思い入れの深さを読者に喚起する「もなし」の機能は受け継がれている。単なる否定ではなく、そこに当然ことながらあるべき「犬」がないということへの啞然とする思いと、犬をそこそこに探す目とが利いているのである。

なお、この「得失」を、「狸」は得たが「犬」をなくした意と解する見方もある。大内初夫氏は、「狸の出でくるのを待っているうちについて寝入ってしまった。目覚めてみると連れていた犬がいない」と解釈されている(新日本古典文学大系『元禄俳諧集』脚注)。左句と状況を合わせた解釈であるが、「いづれ狸得失／覚めて……」と、中七を割っての解釈となり、無理がある。「得失」は、すでに見てきたように、狸を追って夢中になっている獺師の様子を言いつつたものと解しておく。

(判詞)

左の句、茂み深く分け入って身を潜める狩人のありさまが読み取れるが、その描写に不審な点がある。右の句も、句の姿は強く、言葉も巧みに用いているが、「得失」がよく分らない。まさに「いづれ……得失」、左右どちらが優れ、どちらが劣るとも分けがたい。よって、持とする。

*

左句の世界を、笠を被った獵師が、茂みの中に深く入り込んで獲物を待つ様子を描いたものとして芭蕉は理解している。おそらく「我笠に月夜忘るる」という言い方に、内にじつと籠もった感覚があり、それが、茂みに深く潜む獵師を芭蕉に思い描かせたのであろう。一句の読みに際して、どういう状況でその言葉が発せられたのかを考え、その表現をリアルにイメージしてゆく芭蕉の読み方がよく示されている句評だと言えよう。

「いぶかしき所」とは、ここでは、狩人の姿について訝しいといっていることになる。大内初夫氏は、その点を「自分のかぶった笠に月夜を忘るる」というと大きな笠をかぶっている感じがあり、茂みに分け入る夜興引から考えておかし」（前引『元禄俳諧集』脚注）と解説する。だが、笠の大きさを訝しいといっているとは解するよりも、「月夜忘るる」という表現を訝しいと言っているのではないか。つまり、笠で月夜だということと忘れるということは、辺りを明るく照らしているように見えないということと、そんな暗い藪の中に身を潜めては、獣も見えないのではないか、というのではなからうか。句の注にも示したように、冬の月は辺りを皓々と照らし出す。「月夜忘るる」はその本意をも外してしまう巧みすぎた表現だった。

右句の評言「すがた強く」は、夜興の様子を直接ありありと詠んでいることをいい、また、「言葉もたくみに」とは、「もなし」の長高さ、「いづれ……」というインパクトを評価している。すでに句注で示したように、「いづれ」は連歌以来の常套的な措辞であり、また二者の比較も基本的な詠み方の一つではあった。「もなし」が連歌で多用された切字であることも、論を俟たない。それを、「いづれ……」と強く言い出し、また、「夜興」の題を廻して、直接それと詠み込まずに表現した巧みさを賞したのである。ただし、右句については、「……侍れども、其得失我もわきがたし」と述べていて、評価すべき点はあるものの、難点もある、と言っている。「其得失我もわきがたし」とは、句中の「得失覚めて」の「得失」が、どういう得失なのか、読者にはっきり伝わってこないことを指摘しての言辞だろう。

「其得失我もわきがたし」はまた、左右両句の優劣が付けがたいことを、右句の言葉を用いて洒落た表現でもある。互いに、それぞれ見るべき点はあるが、不審の点、今ひとつの点があるという。左は、自分の笠によって月夜であることを忘れたという表現に、茂みに深く身を潜めたありさまの表現として納得できないという。右は、「得失覚めて」の意味がとりにくいところが難点であったろう。結局、「持」すなわち勝負なし、ということになったのである。

〈本文〉

四番

左 勝 枯野

松苗も枯野に目だつ嵐かな

枳風

右

大橋を枯野にわたす入日かな

全峰

左の句、木枯の吹尽して、苗松のそよぐとう

ごきたる、風のやどりめにたつべき物也。寸

松虹梁のすがたをふくみて一句たけたかし。

右も又、かれ野々風景見捨がたく侍れども、

苗松のかたや目に立侍らん。

〈現代語訳〉

左 勝 枯野

嵐が吹き荒れ、千草もすっかり枯れてしまった野中では、健気に揺れ動く緑の小さな松苗の姿が、いつそう際立って見えるではないか。

* 「松苗」は松の苗木。苗松とも。

「枯野」は冬の季題。有賀長伯の『初学和歌式』（元禄9）には、

枯野には寒草をもよみ、又はのべのちぐさも霜にくちはて、霜のみさえ渡る心をもよむ也。或は秋の花野を思ひいで、あはれをもよほし、千ぐさはみなかれはて、残る小篠のみどり寒けしとも。くたら野といふは冬野をいふ。又、つのくにの名所にもあり。枯野はあはれあさからず、そゞろさむき体、相応也。おもしろく興ある体によめるものによるべし。

とある。「枯野」は千草の枯れた野原の意で、色彩感の乏しい野辺の寒々しくも蕭条たる情景を喚起させるところに本意がある。次の西行の『山家集』の例歌など、詞書の内容ともども参考にならう。

陸奥国へまかれりける野中に、目にたつさまなる塚の侍けるを、問はせ侍ければ、これなん中将の塚と申すと答へければ、中将とはいづれの人ぞと問ひ侍ければ、実方朝臣の事となん申けるに、冬の事にて、霜枯れの薄ほのく見えわたりて、おりふしものがなしうおぼえ侍ければ

くちもせぬその名ばかりをとゞめをきて枯野の薄かたみとぞみる
俳諧では、芭蕉の「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」(元禄8『笈日記』)が周知の句だが、江戸時代を通して「枯野」の句は絶えず詠まれ続けている。次にその例句として適宜に選んだものを挙げておく。

霜白し枯野のそばの花月夜

翠紅(天和3『虚栗』)

日あたりもこころに寒き枯野哉

湖風(元禄3『其袋』)

蟪蛄の尋常に死又枯野哉

其角(元禄3『いつを昔』)

棹鹿のかさなり臥せる枯野かな

土芳(元禄4『猿蓑』)

吹風の落つきもなき枯野かな

成菌(元禄6『曠野後集』)

かなしきの胸に折レ込枯野かな

呂丸(元禄7『炭俵』)

獣の道一筋のかれのかな

青柳(元禄7『其便』)

牛の行く道は枯野のはじめかな

桃酔(元禄11『続猿蓑』)

枯野にて目にたつものは小松かな

釣壺(元禄11『泊船集』)

最後の釣壺の句は、枳風の句と類想のようだが、風の存在がないだけ、解釈上は疑問の余地のないほどあっさりとした句にみえる。
なお、この枳風の句は『続虚栗』(貞享4)にも入集する。

右

日が傾き、空の色も変わり始めた頃、その沈みゆく夕日は、まるで枯野に大きな橋を渡しているかのように見えるではないか。

* 「大橋」は「入日」の見立てで、實在しない。「わたす」は架するの意。橋は一般に河川に架かるものだが、ここでは枯野に架かるとした。それにしても「入日」を「大橋」に見立てたところ、いささか想像しにくい光景であって、強引に過ぎるようにも思われる。

(判詞)

左の句、ひとしきり木枯らしが吹き去った枯野では、そよそよと揺れ動く松の苗木が風やどる場所になっていて、目立つものである。小さな松が、虹梁として使われるまでに成長していく姿も彷彿とさせて品格がある。右もまた、枯野の景を大きくとらえた句として捨てがたいが、苗松の句の方がより際立った作だといえよう。

* 「木枯らし」は晩秋から初冬にかけて激しく吹く風のこと。冬の季語。芭蕉は枳風の句に対し、「木枯の吹尽して、苗松のそよぐとうごきたる、風のやどりめにたつべき物」と評しているように、嵐はあらかたおさまったものと解し、そこから「風のやどり」を引き出している。「風のやどり」は風の宿るところ。

これは『古今和歌集』(春歌下)所収の素性法師の歌、

桜の花の散り侍りけるを見てよめる

花散らす風の宿りは誰か知る我に教へよ行きて恨みむ

を念頭に置いたものか。もしそうだとすれば、芭蕉は、野原の草々を枯らして過ぎ去って行った嵐の宿り先は、あの微風になびいている苗松ですよ、と応じたことくである。いずれにしても、この判詞の解く内容が芭蕉独自の鑑賞眼によるものであることに注意したい。果たして作者枳風は、芭蕉が言及する「風のやどり」まで想定していたか否か、疑問は残る。

「寸松」は小さな松。「虹梁」は虹の形のように反りを持たせた梁のこと。梁の部材としてアカマツなどくに耐久性にすぐれているという。ここは「寸松虹梁」で、たとえ今は小さな松であっても、いずれ虹梁に使われることを想わせるような姿を備えている、の意にとる。蘇東坡の「故李誠之待制六丈挽詞」(明曆2『東坡先生詩』ほか)に、

青青一寸松、中_ニ有_一梁棟_ノ姿_一。

とあるのによる。芭蕉は「寸松虹梁」の語句をもって「松苗」の将来にまで思いをめぐらせているわけだが、この点について、枳風の真意を問う必要はなからう。逞しく生育していくことが期待される「松苗」に向けられた芭蕉のこうした把握の仕方は、おのずと一句の鑑賞の幅を広げる方向へと導いてくれるように思われる。

そもそも枳風にしてみれば、枯野一帯に吹き荒れる嵐の中、風の勢いに負けまいと必死になっている(ように見えた)松苗をとらえ、興のおもむくままに詠じたのではなかったか。作者も芭蕉も、冬枯れた情景中にある小さな植物の強靱な生命力に共感していることは確かだろう。しかし芭蕉は、前述したように、木枯らしの吹き止んだ後の苗松の微妙な動きをとらえながら、「風のやどり」まで想起し、鑑賞を深めていこうとする。「寸松虹梁」もしかし。ここでの芭蕉は、思いのほか繊細で深遠な理解を提示していることがわかる。

一方、全峰の「大橋を」の句は、枯野の全景を大胆な手法で描き出しているとはいえ、芭蕉は、そうした理知的な処理による大味な作より、小さな命に秘められた力強さが感得できる枳風の「松苗や」を支持したのである。

〈本文〉

五番

左 持 網代

子をつれて夜の網代に簀狭し

心水

右

網代木のゆるきやみぬる氷哉

不角

網代の床に子をつれたる作意
めづらかにしてやさし。

右又あしろの杭の氷にとどて

寒さいやましたるけしき

左右感心わきかたし

〈現代語訳〉

左 持 網代

子供を連れて、夜の網代の番をする。凍てつく寒さに、二人で一つの簀にくるまるが、何とも狭いことだ。

* 「網代」は冬の季題。川の中に網を引く形に杭を打ち、先端の簀や筥うけの中に魚を誘い込んで取る仕掛けをいう。宇治川や田上川で氷魚（鮎あじろの稚魚）をとるのが著名で、和歌でもそれらを詠むことが多い。『初学和歌式』に、

あじろは、氷魚ひまといふ物をとらん為に、あじろといふものをかけて、川下よりのぼるひをの其中に入れてぬやうにしつらふ也。あじろの床といふはあじろをもる人のゝぼりてゐる床也。あじろもる人をあじろもりとも、あじろ人ともいふ（中略）あじろ木とは、あじろをうつ木也。かぢりをよむは、かぢり火にてひをのよるをみる也。又説かぢりの水にうつれる影につきてひをのぼるともいふ。あじろの名所は、宇治川、田上川、たなかみ吉野川によめり。其外はなし。氷魚はちいさきうをの白き物也。よつて水の氷にまがへ、又月影にまがふよしをもよめり。

という。心水の句は、夜の網代守を詠んだものである。右の記述にもあるように、「網代」は冬の景物であり、また氷魚を捕ることから、「寒き夜」が詠まれ、特に氷魚を月光になぞらえて、夜の景を詠む歌も多い。網代守の寒さを詠んだ歌も若干あるが、その簀を詠んだ歌はなく、子供を詠み込んだものも、『正徹千首』の、

かがり火によりてぞあたる里の子の網代もる男を知る人にして

歌があるくらいで、珍しい。心水の句は、網代守の簀、子供といった題材の特

異性に加え、和歌の「寒き夜」を「寒」という言葉を使わず、子連れで寝にくるまる行為によって表現した点が新しい。「寝狭し」という表現が、具体的に寒さと、そして親子のぬくもりや情愛を表している。

右

川波に揺れていた網代木の動きが止まった。あまりの寒さに凍りついたとみえる。

* 「網代木」の揺らぎに着目した歌は少なく、

『松下集』三六番自家歌合 右 網代群遊

よる浪はただこゆるぎぞ網代木にさかなもとむるうちの郷人

『夫木和歌抄』

光俊朝臣

さらぬだになみもてゆるするあじろ木にながしかけたる宇治の柴舟

の二首を見出すに留まった。「氷」は「網代」によく詠まれる題材で、『類船集』でも付合語になっている。その場合、『初学和歌式』にあるように「氷魚」を指すこともあれば、次の『風雅和歌集』の歌のように、氷が網代に寄る冬の寒々しい景を詠むこともある。

文保三年、後宇多院へたてまつりける百首歌の中に 前大納言為世

風さゆるうちのあじろ木せをはやみ水も浪もくだけてぞよる

ただし、網代木が凍りついて動きが止まる、という歌はなく、和歌にはない観点から「氷」を用いて網代の寒さを詠んでいる。

なお、本文は「ゆるきやみぬに」とも読めるが、その場合は、網代木の動きが止んだことに不審を抱き、見ると凍りついていた、という「発見」の意味が加わることになる。

〈判詞〉

網代の床に子供を連れてくるという一句の作意は、目新しく、情愛が感じられる。右句は、また、網代の杭が氷にとざされて、寒さがいっそう増した様子を詠んだのはすばらしい。左右の句、ともに心に深く感じて勝敗がつけられない。

* 「めづらか」は、例えば、『貝おほひ』一番「左の発句は……うどんげよりもめづらかに覚え侍る」の用例などからも、目新しい、珍しい、の意味。左句の題材についての的確な評である。一方、「やさし」は歌合・句合の用語としては、優美・風雅の意味で用いるのが普通だが、ここでは、親子連れの網代守について、情愛が深い、といっているのだろう。歌合の評語として頻出する「やさし」を、わざと異なる意味で用いた面白さがある。

右句については、網代が氷に閉ざされる、という新しい詠み方に着目している。ともに和歌とは異なる視点から「網代」の寒さを表現したことに対して評価し、「持」となった。

〈本文〉

六番

左 勝

石蘭

破れ葉のツハに顔出す鼯かな

調柳

右

つわ咲や誰が引捨し雪車の跡

立些

左りの句、鼯とかいふものゝわが方を

見おこせたと云けんをのゝ薄

もおもひよせられておかしく侍るに、

引捨し雪車の句意しかときゝ得ず。

仍以左為勝

〈現代語訳〉

左 勝

石蘭

つわぶきの破れた葉から顔を出してこちらを見ている鼯であるよ。

* 「石蘭」は『書言字考節用集』に「ツハブキ」「ツハ」の訓みで載る。つわぶきはキク科の常緑多年草で丸い腎臓形の深緑色の葉を持ち、十月から十二月にかけて菊に似た鮮黄色の花を咲かせる。『毛吹草』『増山井』に「つはの花」で十月（初冬）の季語として掲出。貞門、談林時代をはじめ江戸時代を通じて作例の数はそれほど多くない。調柳の句では「破れ葉」とそこから顔（ツラ）を出す鼯の姿に焦点が当てられているが、破れ葉のつわぶきには当然葉よりも高い位置に花が咲いていると取るべきであろう。中七「ツハにツラ出す」というツ音の繰り返しが一句の声調を整え、リズムミカルな効果を生んでいる。「破れ葉」の語から連想される植物はまず第一に芭蕉であり、この句は、山居の僧のもとを「雪のうちの芭蕉」の精が訪れる謡曲「芭蕉」のパロディと捉えることもできようか。

右

つわの花が咲いた。雪車を引いた跡の残る雪の上に、誰かがその黄色い花を引き捨ててあることだ。

* 「雪車」は雪の上を人や物を載せて運ぶ物。「雪舟」「橇」とも表記する。『毛吹草』に十二月の季語として掲出。「雪車の跡」で、雪の上につけられた雪車を引いた跡の意。雪につけられた車の跡を詠んだ和歌として『雪玉集』（寛文

十年刊)に収載の「小車をたがひく跡かしたの帯のみちはかたがた雪にみゆらん」などがある。「引捨し」は、つわぶきの花を抜いて捨てたことを指すと解したが、「引く」は雪車と縁語であり、「引捨し」の対象を雪車と取り、引き捨てられた雪車の跡につわぶきの花が咲いた、と一句を解することもできる。ただしその場合「引捨し雪車の跡」とは具体的にどのような情景なのか、そしてつわぶきの花とどう関わるかなどわかりづらい点が多い。

〈判詞〉

左の句は「鼬とかいふものの……わが方を見おこせたる」という『源氏物語』手習の巻における小野の里でのできごと、またその小野にまつわる薄の伝承(小野小町のどくろの目の穴から薄が生え「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはいはじ薄おひけり」と詠んだ伝承)も思い寄せられて、面白く思われるのに対して、「引捨し雪車」と詠んだ右句は句意がはっきりとわからない。したがって左の勝ちとする。

* 「鼬とかいふものゝわが方を見おこせたる」は、『源氏物語』手習巻において、入水した浮舟が横川の僧都に助けられ、小野の里にある妹尼の家で休んでいると、その母の老尼が夜半に起きて不審に思う次の場面の傍線部を踏まえると考えられる。

尼君しはぶきおぼほれて起きにたり。灯影に、頭つきはいと白きに黒きものをかづきて、この君の臥したまへるをあやしがりて、鼬とかいふなるものがさるわざする、額に手を当てて、「あやし、これは誰ぞ」と執念げなる声にて、見おこせたる

「をのゝ薄」は、「鼬とかいふ……」と書かれた出来事のあった「小野」の地名を出すとともに、その小野と結びつく小町の薄の伝承を続けて記したもの。つわの花の下の暗い葉陰から顔を覗かせる鼬の様子に、どくろの目穴から薄が生えた様子を想起したのである。「しかときゝ得ず」は、はっきりと理解できない意。「仍以左為勝」は、歌合の判詞などに用いられる慣用表現であり、漢字五文字の形(「左」の部分には「右」も入る)で、文末に用いられる。

『続の原』冬部の芭蕉判詞には、この他にも三番に「仍以持(仍って以て持とす)」などと用いられている。

〈本文〉

七番

左 勝 鴨

鈴鴨の声ふり渡る月寒し

嵐雪

右

鴨くはて菜を干枯す塩屋かな

魚児

すゝかもの声ふりたつる秀句かきり

なし。一句やすらかにして厳寒の気

しき尽たり。彼妹かりの哥を

吟すれば六月廿四日の日も寒しと

云けむ、さる事にや。右の句も

蚕を飼ふものゝきぬきぬためし

もあはれに侍れとも、すゝかものすゝ

の声、句調たかしとやいはん。

〈現代語訳〉

左 勝 鴨

冬の夜空を鳴きながら鈴鴨が渡ってゆく。同じように渡る月の何と寒々しいことよ。

- * 「鴨」は冬の季題。和歌では『万葉集』以来、上毛、うき寝やその羽音、鳴き声などが読まれている。俳諧では、鴨鍋・鴨の汁など、食材としての詠み方が目立つようになるが、嵐雪句では、和歌以来の鳴く鴨を詠んでいる。「鈴鴨」は和歌の作例が少ないが、貞門俳諧ではよく詠まれる題材。鳴きながら飛ぶことを、「鈴」の縁で「ふり渡る」とした。また、「渡る」は「月」にもかかる。縁語、掛詞仕立てではあるが、奇をてらった技巧ではなく、金属的な鈴の音と、寒々とした冬の月との調和がとれた感覚的な句となっている。諸注、解釈に大きな違いはない。

右

捕った鴨を食べることもせず、軒に干した菜も枯らしてしまった塩屋だなあ。

- * 食材の「鴨」というのは俳諧では一般的ならえ方だが、あえて「鴨くはで」とひねったところがポイントである。鴨は自分たちが食べるためではなく、売って生活の足しにするために捕ったのであるう。「塩屋」は歌ことばで、海水を煮詰めて塩を作る小屋をいう。海人の貧しく辛い生活を象徴する言葉である。

そこに、

さすらへの宿に干菜も見苦しや 長頭丸(『紅梅千句』第四)

などの例があるように、干し菜という貧しく、俳諧的な食材を加えた。しかも、その干し菜が枯れている点が、この海人の生活の辛さを感じさせる。なお、「菜を干す」は冬の季語で、「鴨」にあわせて冬らしい景色になっている。「干枯す」は、干して乾かすのか、干し枯らしてしまうのか、意見が分かれたが、ここでは枯れてしまっている景ととりたいたい。なお、新日本古典文学大系『続の原』(元禄俳諧集)の解釈は「鴨を獲つても金に換えて食うこともない海人の塩屋では、軒下に副食にする掛菜が干してかわさかされている」といい、校本芭蕉全集(俳論篇)も同様。

また、「塩屋」なのに菜も鴨も塩漬けにしない、の滑稽もあるか。

〈判詞〉

鈴鴨が声を張り上げて鳴く、とは大変すぐれた句だ。一句は、なだらかで深い趣があり、厳寒の情趣が十分言い尽くされている。あの「妹がりの歌」を吟ずれば、猛暑の六月二十四日も寒く感じられると言うが、そのような事であろうか。右の句も、蚕を飼う者は絹織物を着ないという例も思われて哀れではあるが、鈴鴨の鈴の声の方が、句の調子が優れている、といえるだろう。

* 「秀句」は優れた句のこと。芭蕉は『十八番発句合』の判詞において、貞室の「是はく〜と計花の吉野山」を「秀句」と評している。「やすらか」は和歌において、趣向を求めず、平淡な調べの中に深みのある詠風を賞する言葉として用いられる。嵐雪句の穏やかな表現を賞したもの。「妹がりの哥」は『拾遺集』巻四の紀貫之の歌を指す。ともに冬夜の鳥の声を詠んだものだが、この箇所は以下の『無名抄』の記述を踏まえる。

(俊恵) 又云、

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり

この哥ばかり面影ある類はなし。六月廿六日寛算が日も、是を詠ずれば寒くなるとぞ或人は申し侍し。大かた、優なる心・詞なれど、態求めたるやうに見ゆるは、歌にとりて失とすべし。結ばぬ岑の抄、染めぬ野辺の草葉に、春秋につけて花の色くを現すごとく、自ら寄り来ることを安らかにいへるが秀哥にては侍る也。

(日本古典文学大系『歌論集』)

「寛算」は平安中期の比叡山の僧で、死後悪霊となつて三条院はじめ天皇家を崇つて悩ませたという。なお、芭蕉の判詞の「秀句」「やすらかにして」という評も、この『無名抄』の引用箇所「安らかにいへるが秀歌」とあるのを意識したか。また、右句の評「蚕を飼ふものきぬきぬためし」云々は、次の「蚕

婦」〔古文真宝前集〕無名氏)による。

昨日到_ル城郭_ニ 帰来_{レバ} 涙満_ツ巾_ニ 遍身_ノ綺羅_ノ者_ハ 不_ス是_レ養_フ 蠶人_ニ

(寛文五年刊『鼈頭評註古文真宝前集』)

「蚕婦」は、蚕を飼う者の貧しい暮らしを歌ったものだが、魚兒自身がこの詩句を意識していたかどうかは不明。和漢の典拠を左右の判詞に使用し、最後は嵐雪句を「鈴」の縁で「句調高し」と評して勝ちとした。

〈本文〉

八番

左 氷柱つらら

風に来て氷柱に下がる楓哉

一桃

右 勝

門閉て閑居をしゆる氷柱かな

琴風

氷柱に下がる楓、ほのかなるけしき

細くからびて哀なるに、右はなを

烟たえぐくにして、律の後は

つららに門を閉ちたる閑居の扉

感情まさりたるやうに覚侍る

〈現代語訳〉

左 氷柱

風に吹かれ飛んで来て、氷柱にぶら下がっている楓であることだ。

* 「氷柱」はつらら。ただし、「つらら」は和歌・連歌では「氷」の意となる（「つららとは、薄氷をいふ」『能因歌枕』。『源氏物語』（末摘花）の「朝日さす軒の垂氷はとけながらなどかつららのむすぼほるらむ」の例では、つららを指す「垂氷」と「つらら」（氷）を別に用いている。室町時代以降は、氷ではなく「つらら」を氷柱そのものとする用例も散見されるが、連歌においては『毛吹草』（連歌四季之詞・中冬）に「氷柱・たるひ」とそれぞれ挙げるように、「つらら」は歌語と同様氷の意で用いられたようである。従って、現代語の意味と同じつららを「氷柱」として詠むのは俳諧からと考えられる。「打ち折りて何ぞにしたきつららかな」（『あら野』・仲冬・八〇六）。「楓」は、季は秋。「蛙手」の変化した語とされる。紅葉といえば楓の紅葉を指すことからか、和歌・連歌・俳諧ともに「楓」を詠み込んだ用例は意外に少なく、「紅葉」を用いることが圧倒的に多い。冬の句ではあるが、手のひらを想起させることから、「氷柱」をつかんでいるような「楓」を詠み込んだのであろう。

右 勝

門を閉じて閑居を強いるように、垂れ下がっている氷柱であることだ。

* 「閑居」は世間との交わりを立ち静かに暮らすさま。本句と類似した景の和歌の例に「山家冬月といふ心を詠める／柴の庵は軒の垂氷に閉ぢられてわづかに

ぞもる冬の夜の月」(『玄玉集』・三三三・性我)がある。「をしゆる」は「教ゆる」の意にもとれるが、判詞や句意から、本来八行の動詞である「強ふる」をヤ行動詞「しゆる」と表記したと考えたい。右の歌例のように、庵などのわび住まいがつららにより閉じられていると詠むのが常套だが、つららが閑居を強いている、とする点が本句の眼目。

〈判詞〉

左の句の氷柱にぶら下がっている楓のかすかな様子は、枯淡の趣がありしみじみとした風情であるが、右の句は、なんとと言ってもやはり、朝夕の煙が途切れるような暮らし向きで、葎が繁っていた秋の季節の後は、氷柱が門を閉じたとする閑居の扉のさまを詠んでおり、深い感動が勝っているように思われる。

* 「細くからびて」は、華やかさ艶やかさの対局で、枯淡の趣と哀れ深さのただようさまをいう。建仁二年(一一〇二)後鳥羽院が歌の様を見るため、当代の歌人たちに課したという『三体和歌』で、「秋・冬この二つは、からび細く詠むべし」との詠み様が示された。『続の原』秋部四番の湖春の判詞にも、「細くからびて言ひなせる」ため「勝」であるとしている。「烟」は、一般にはよく知られた仁徳天皇の「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」(『新古今集』・賀・七〇七、他)から炊飯の煙の意とされるが、ここでは広く暮らし向きをいうのであろう。山居から煙の絶えるさまを付けた連歌例に、「恵みの露も捨つる身は憂し／朝夕の煙も絶えし山の奥」(三島千句第六百韻・三六／三七・宗祇)などがある。「葎の後はつらら・…」の「葎」は茎や枝に棘がある草の総称。葎の茂る門は、「淋しくあばれたらむ葎の門に」(『源氏物語』・帚木)のように荒れた家をいう。「八重葎繁れる宿のさびしさに人こそ見えね秋は来にけり」(『拾遺集』・秋・一四〇・恵慶)のように、和歌では幾重にも繁る「八重葎」が多く詠まれた。門を葎が閉じたとする歌も「閑居／道も絶え門も葎に閉ぢられて見ゆらむものを独り臥すやは」(『御室五十首題和歌』・六四七・守覚法親王)などが見える。また、ここでは葎が棘のある植物であることから、同じ尖っているつららと対にしたか。「感情」は「感情^{カムセイ}」(『前田本色葉字類抄』。しみじみとした深い感動をいう。

〈本文〉

九番

左 持

霰あられ

あかつきの霰は冬の信マユコトかな

李下

右

森ふかく野馬飛込あられかな

伸風

烈風寒威、暁の寢覚、冬のまこと、

いへるぞ、かくてはよにもあられふる哉

と吟声さびしきに、右は又、

野馬の霰まぐに驚たるさま、能

云叶られたり。聞処きこ見る処、師曠しこ

が耳をそばだて、離妻りよが目のさやを

はづすといふ共、左右の是非弁ずる

事あたはじ。

〈現代語訳〉

左 持

霰

夜明け前のほの暗い頃に降る霰の音を聞くと、冬も本番になったとしみじみと感じられる。

* 霰とは、空中の雪に過冷却の水滴が付着した、白色不透明の小さな氷の粒である。古くは夏に降る雹も霰に含められる場合もあり、『類船集』の「霰」の項に「夏の日、白雨にいかづちはためき霰のふる事まゝおほし」とあるが、近世の多くの歳時記は冬の季題として載せる。なお現代の気象学上では、季節に係なく直径5ミリ以上のものを雹、それ以下のものを霰と呼び分けている。和歌では寒い夜の孤独感をつのらせるもの、玉のごとく美しいものとして詠まれるほか、霰が板屋などに降る音のわびしさが詠まれる。また「〇〇のまこと」という表現も和歌で多く用いられるが、「ゆめのまこと」「うつつのまこと」「心のまこと」「法のまこと」「人のまこと」といった用例が中心で、その時節らしさの象徴といった意味で詠まれた例は見られない。また、この句は「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける」（後撰和歌集・冬歌・四四五）や、謡曲『定家』にも取られて有名な藤原定家の「偽りのなき世なりけり神無月誰がまことより時雨初めけん」（続後拾遺和歌集・冬歌・四一五）をふまえており、時雨を意識した詠みぶりとなっている。「冬の信」は、「冬のはじめに降る時雨」に対して「本格的な冬に降る霰」というニュアンスを表しているといえる。

右

突然降り出した激しい霰に驚いて、放し飼いになっている馬が慌てて森の奥深くへと飛び込んで走っていった。

* 森と霰、馬(駒)と霰、いずれも和歌では一般的ではない取り合わせであるが、『千五百番歌合』に霰に驚いて雉子が飛び立つさまを詠んだ歌が見える。
九百八十五番

左 隆信朝臣

いしまわけおつるよそめはそれながらおとせぬたきやたるひなるらん

右 家長

こまなめているののすゑにあられふりまだかりゆかぬきぎすたつなり

左歌、さも侍りなん。右歌、あられにきぎすのおどろきてたたん、さもときこえ侍れば持にや。

俳諧では野馬は天象とともに詠まれることが多く、近い頃の例では「親と子の霜夜をかこふ野馬哉 溪石」(『続の原』)「稻妻に母を離れぬ野馬哉 等鹿」(『惹摺』)「うらゝさや野馬ふりむく朝日影 元峰」(『桃の実』)「身は楽に時雨を通る野馬哉 残香」(『笈日記』)などが挙げられる。深山に降る霰、という伝統的なイメージをふまえ(『類船集』)「霰：深山」、突如として降り出す霰の激しさを、霰の音に驚く馬の動作によって描写した点が新しいといえる。

〈判詞〉

激しい風と厳しい寒さ、暁の寢覚めのわびしさを感ぜさせる霰の音を、「冬のみこと」と表現したところは、和歌に「かくてはよにもあられふる哉」と詠まれたさびしい吟声そのまま、右句はまた、野馬が霰に驚いたさまを巧みに表現している。聞くところ、見るところ、たとえ非常に聴覚に優れた師曠が注意深く聞き、非常に視力のよい離婁が目まをこらして見たところで、左右の優劣を判じることができないであろう。

* 「かくてはよにもあられふる哉」は、「古屋霰」を詠んだ頓阿の「年をへてあれ行く宿の板びさしかくても世には霰ふるなり」(草庵集・七六〇)を指す。この歌について宣阿著『草庵集蒙求診解』(享保八年刊)では「宿のあれうき住居なるに、ことに板屋は霰の音のはげしくて、寒きにかくのごとくにてもあればあらるゝ物也とよめり」と注され、荒れ果てた板屋に霰が降って激しく音を立てている、わびしい冬の情景が思い浮かべられている。「聞処見る処」とは、左句が聴覚的に、右句が視覚的に霰をとらえた句であることを言ったものである。師曠・離婁は『蒙求』の師曠清耳・離婁明目の故事に登場する人物の名前である。「目のさや」はまぶたのこと、『犬子集』に「ゆふだちや目のさやはづす稲光 徳元」と詠まれるように「目のさやをはづす」で、注意してよく見るとという意の諺として通用していた。

〈本文〉

十番

左 勝

神楽

御神楽みかぐらや火たくえしを焼衛士かぐらにあやからん

去来

右

鉢はち扣たたきましりて狂くるフ神楽かぐらかな

孤屋

左りの句ひたひた、させる難なんもなく、秀ひいでたる

所ところも見えず。

右は、鉢はちたゝき神楽かぐらに可まし交まじ事きごと

いかゞ。右に難なんあるをもて、

ひだりかた、

勝かちたるべし。

〈現代語訳〉

左 勝

神楽

陰暦十二月十一日、夜分に宮中の内侍所で御神楽が行われている。見物客も演者も季節が寒さがこたえるので、庭火を焚いて暖かそうにしている衛士（ここでは、神事や祭りで雑役に従事する仕丁）にあやかっけて暖を取ろう。

* 「神楽」は神前に奏せられる歌舞で、神遊びとも言う。神楽は宮中で行われる「御神楽（みかぐら）」と民間で行われる「里神楽」に大別される。『毛吹草』『増山井』では十一月、『花花草』では十二月、『御傘』『俳無言』では冬・夜分となっている。この句は、「御神楽」とある通り、宮中の神楽の事を詠んでいる。宮中の神楽は「内侍所の御神楽」と言い、十二月十一日宮中の内侍所（今の賢所）の前庭で庭火を焚いて楽人が参入し、それぞれの演奏、歌人の歌などが続く。『御傘』では「内侍の御神楽 十二月十一日」とあり、『増山井』では「官人庭火をたき」とある。「焼」は『書言字考節用集』に「タク」とあり、ここでは「火をたく」と読む。「衛士」は夜は火を焚いて宮門を警護するなど、宮城の警護・雑役に従事した兵士のこと、大中臣能宣「御垣守衛士のたく火の夜はもえ昼はきえつつ物をこそ思へ」（『詞花集』恋上）が『百人一首』にも採られ有名になった。『類船集』には「火焼」の付合語として「衛士・神楽」が見られる。この句は、能宣の歌を踏まえつつも、御神楽を見物客の立場（舞を舞ったり、歌を歌う演者の立場とも取れる）から捉え、その寒さに着目した点が妙味と言えよう。同様、神楽の寒さを詠んだと思われる句に、来山の「水涕に神楽の袖をぬらしけり」がある。

右

鉢叩の僧が、瓢箪または鉢や鉦を鳴らしながら、中にまじって一緒に踊り狂っている神楽（里神楽か）であることよ。

* 「鉢扣」は空也念仏のことで、陰暦十一月十三日（空也忌）から四十八日間、京の内外を瓢箪または鉢や鉦を叩き鳴らし、和讃・念仏を唱え歓喜の情を表して踊る。『花花草草』などでは十一月、『毛吹草』などでは十二月の季の詞に所収。この句は、その鉢叩きが神楽にまじって踊り狂うという句意であるが、このでの神楽は左句の御神楽ではなく、里神楽のことだと思われる。「里神楽」は、民間での神楽で、『俳無言』には「その（内侍所御神楽）他は伊勢をはじめて里神楽と云也」とあり、伊勢流の舞型神楽（湯立神楽）をはじめ、出雲流の神能型神楽・巫女神楽・獅子神楽（山伏神楽・太神楽）などがあり多岐にわたる。ここでは、獅子頭を仮の神の姿として村々をめぐり、悪魔祓いをする獅子神楽あたりを指すか。『人倫訓蒙図彙』の「代神楽」の項に、「只鞞太鞞ことやうにたゞきたてゝ、太鞞打のつらつき狂人のやうなるをみてうれしがる。しかのみならず、獅子が立て扇の手をつかひ、一谷節で舞」とあり、代神楽（太神楽）で、獅子の舞う中、鼓や太鼓を狂人のように叩いて興に入っている姿が看取できる。こんな中に、同じく瓢箪や鉢・鉦を叩いて練り歩く鉢叩がまじって狂ったように踊った場面を孤屋は想定したのかもしれない。

〈判詞〉

左の句は、これといった難点もなく、かといって傑出したところも見られない。右の句は、鉢叩の僧が神楽にまじって踊り狂うことを詠んでいるが、果たしてそのようなことはできたのだろうか。そう考えると右の句にはやはり問題点があるので、左の句が勝ちとなるべきである。

* 「難」は冬の一番にも「難じて」とあり、また『貝おほひ』四番にも「難もなければ」とあり、芭蕉の句の判断の目安の一つとして用いていたことがわかる。特にここでは、芭蕉は右の句に対し、「難あるをもてひだりかた勝たるべし」と最終判断している。この「難」とは、右句の「鉢たゞき神楽に可交事いかゞ」と疑問を呈した点である。つまり、芭蕉は鉢叩きが神楽にまじることができたかどうかについてを問題視し、その可能性を否定的に捉えた結果、難点とみなしたと思われる。しかし、前出の通り獅子神楽のような村落を練り歩くような里神楽であれば、その可能性は十分あったと考えられる。とすると、芭蕉はここでの神楽を左句と同等の御神楽と見て、宮中の御神楽に鉢叩がまじることなど考えられないので、右句を「難ある」とみなしていたのかもしれない。

〈本文〉

十一番

左 勝 頭巾づきん

山里や頭巾とるべき人もなし

京 観水

右

頭巾きぬ出家見らるゝ野中かな哉

籠言

目にふれぬ山中の客、そゞろに愛

せらるゝ楓林ふうりんもあるか。右は、目に

立て猶たちすぎき

冬野ゝ法師、人には

いかゞおもはるゝ心ばへもありなん。

左まさるべし。

〈現代語訳〉

左 勝 頭巾

冬の山里では木こりや猟師などの山賤のほかに出会う人もなく、京の街中のようにわざわざ頭巾をとって挨拶する人もいないことだ。

* 「頭巾」は和歌には用例が見られないが、俳諧では『犬子集』以下に頻出する。

『花草』『せわ焼草』『通俗志』等に兼三冬、『毛吹草』『増山井』等に十月、『袖かがみ』に十一月とする。『類船集』に「猟師はほくそづきんといふものをかぶると也。貴人高位の前にてはかぶらず。途中にて人にあふては先づきんとる事ぞ、『和漢三才図会』には「風寒ヲ厭フ褻用之物、之ヲ著テ人ニ対スルハ甚ダ不礼也」とあるように、防寒用の日常着で、これをかぶったままで人と対面することは無礼であった。「山里」は和歌以来多くの用例を持つ。そこは出家者や隠者、社会からの逸脱者などの住む場所であり、『古今集』に「春立てど花もにほはぬ山里は物憂かる音に鶯ぞ鳴く」（春上）、「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつ」（秋上）、「山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草も枯れぬと思へば」（冬）とあるように、遅い春の訪れや、秋冬の寂しさが詠まれた。『類船集』「山里」の項はこれらの和歌を踏まえ、「鶯のこゑに春を知」「冬ぞさびしき」等の付合語を持つ。京の人、観水が冬の山里を訪れた際に目にした、粗野な山人の実風景であろうか。

右

禿頭に頭巾もかぶらずに外出する出家の姿が見られる、冬の野中であることよ。

* 『古今集』の「いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心を知る人ぞくむ」（雑

上)に代表されるように、和歌における「野中」は、播磨国印南野にあったという「野中の清水」をさす場合がほとんどであるが、俳諧においては一般的な「野の中」を示す語として用いられている。

〈判詞〉

左句は、冬の山里に、ふだんは山人が目にしないうような都の客がわざわざやって来たのは、杜牧の「山行」に「停車坐愛楓林晚、霜葉紅_二於二月華_一」と詠まれるように、そこに何となく心惹かれる楓林があつてのことだろうか。右句は荒れた冬野を、禿頭に頭巾もかぶらず目立ったさまで行く法師のさまで、「法師ほど羨ましくないものはない。「人には木の端のように思われる」と清少納言が『枕草子』に書いたのはもつともだ」と『徒然草』にあるように、この句には(人から木石のように思われている僧侶が)頭巾もかぶらないで外出する姿を、人はどのように見るだろうかという思いを込めているのである。右句にはこのような作意が感じられるので左句のほうが勝っている。

* 左句に対する「そぞろに愛せらるゝ楓林もあるか」との評は、『三体詩』の杜牧詩「山行」、遠上_三寒山_一石径斜 白雲生処有_二人家_一 停車坐愛楓林晚 霜葉紅_二於二月華_一の三句目によるもので、わざわざ冬の山中を訪れる人があること理由を、そこに心惹かれる楓林のようなものがあるからだろうと推し量っている。また、右句への「人にはいかゞおもはるゝ心ばへもありなん」とは、『枕草子』の「思はん子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ。たゞ木はしなどのやうに思ひたることいとほしけれ」を踏まえた『徒然草』の一節、「法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるゝよ」と清少納言が書ける、さることぞかし」が思い起こされる句で、人に木の端のやうに扱われる僧侶が、冬の荒野を頭巾もかぶらずに禿頭を丸出しに行く姿を、一体あんなに目立って、人からどう思われるだろうかと難じる気持ちが入められているのだろうと推測する。このように右句には作意が感じられる点を難として、左句を勝としたものであろう。また左句を「目にふれぬ」、右句を「目に立て」と対照的に捉えた点も注目される。

〈本文〉

十二番

左 煤掃すすはき

何方いづかたに行ゆきてあそばん煤すすはらひ

拳白

右 勝

煤すすとりて寺てらはめでたき佛ほとけ哉かな

不卜

すゝはきの日の遊あそび所ところを侘わびたるも

優ゆうにして艶えん也。右は寺てらの煤掃すすと

思おもひよりたる、先珍ますちん重ちゆうにや。兩句

滑稽こころにかんずのまことをうしなはず、感かん心しん。

わきがたく侍はべれども、目めでたき佛ほとけ哉

と云いし句くのいきほひ、猶なほまさり

て聞きえ侍はべれば、為勝かちとす。

〈現代語訳〉

左 煤掃すすはき

煤すすはらいの日は、わが家に居てもじやまになり、よそ様の家を訪ねてもやはり煤すすはらいに忙いそしく、客を迎えてはくれない。さて、どこに行つて（俳諧に）遊あそんだものだろうか。

* この句は、『秋津島』『祇園拾遺物語』にも同形で所載。『宰陀稿本』では上五「何方へ」。「煤掃すすはき」は十二月の大掃除のことである。「すすはらい」とも言う。

事始めである十二月十三日を江戸城や禁中で煤掃の日と定めていたが、実際には十三日では早すぎるので、それ以後の適当な日を選んで行なうのが普通であった。元禄九年刊の『芭蕉庵小文庫』に、当時の煤掃を活写した曲翠の文章がある。「あけぼのの空よりもものはたはたと聞ゆるは、畳を叩く音なるべし。

今日は師走の十三日、煤掃のことぶきなり。げにや雲井の儀式、九重の町の作法は嘉例あることにして、ただ並みなみの人の煤掃すすく体ていこそいとおもしろけれ。各々門かどさしこめて、奥の間を屏風に囲ひなし、火鉢に茶釜をかけて、姫おんなが帷子かたびらの上張うわばり、爪先見えたる足袋もいと寒く、冬の日影の早く昼になりゆき、庭の隅・調度ども取り散らしたる中に、持仏の後向きたるぞ、目には立つなれ。家の童えんの椽えんの破れ・簀すの子の下を覗きまはるは、何を拾ふにやとあやし。味噌と呼よばる大男おんなの、袋かぶり蓑着たるもめづらかに、米櫃こめびつのサン打ちつけ、俎まないたしらけ、行燈あんどん張り代へて、田作り鱧なます・浅漬あまひつけの香り花やかに、上下の膳かみしもを据え並べたるに、ほどなく暮れて、高軒たかねとはなりぬ。／煤掃や暮れゆく宿の高軒」。

右勝

煤掃の日、寺でも一年の煤を取り去って、めでたく新年を迎える支度ができた。きれいに身を拭われた仏さまの像が、あらためてありがたくなったように見える。

* 「めでたき」が上下に掛かり、「寺はめでたき」と「めでたき佛」の両方の意味がこめられているのだろう。貞門風の古い風体の句。作者の不卜は本書『続の原』の編者であり、句合では四季に一句ずつ登場するが、春夏秋冬はいずれも「持」（引き分け）であった。ここは最後の一番なので、発句の評価ゆえというよりは編者を尊重するために、芭蕉から「勝」をもらったと思われる。

〈判詞〉

左句のように、煤掃の日に俳諧に遊ぶ場所がなくて嘆くという心のはたらきも、優雅であり美しいものである。また、右句は、寺の煤掃を着想した点が、まず第一にすぐれている。両句とも、「滑稽のまこと」すなわち俳諧の本質を失っていないことは感心である。勝ち負けを決めることがむずかしいのですが、「めでたき仏哉」と言った句の勢いが、より勝つて聞こえますので、右句を勝ちとする。

* 「侘たる」の「侘ぶ」は、何ごとか欠落や不足を嘆くこと。挙白の左句は、ほんらいは「老人が家におれば邪魔になる」（新・古典文学大系『元禄俳諧集』・注）というだけの意で詠まれたものかもしれない。右のように「俳諧に遊ぶ場所がなくて」としたのは、芭蕉の好みに近づけた解釈である。元禄二年五月末、出羽大石田にての「さみだれを」歌仙の名残ウラ一く三句に、

雪みぞれ師走の市の名残とて

曾良

煤掃の日を草庵の客

芭蕉

無人を古き懐紙にかぞへられ

一栄

という、挙白の句から発想されたい運びがある。「優にして艶」は、上品でやさしく美しいこと。この判詞としては、現実生活の「煤はらひ」から遠ざかり俳諧風雅の世界に「あそばん」とする心の動きが「優にして艶」なのである。また、「滑稽のまこと」をうしなはず」とは「俳諧の本質をうしなわないでいる」ということ。それに続く部分は、「感心わきがたく」と続いているという可能性もあるが、それだと意味が取りにくいので、「感心」で文が切れるものとして右のように訳した。「わきがたく」の「わき」（分き）は、力行四段活用の動詞「分く」の連用形で、判詞の中の語であるから、勝ち負けを決める意となる。

〈本文〉

一柳軒不卜のぬしは、身を塵境に随ひせまりて、心ざしは雲あるやまのいはねをたどり、あるはよしのゝ花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅のやつことなる事としあり。これよりさきも集頭す事ふたゝびに及といへども、春秋遠く、雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさま／＼に、唐朝の牡丹も花しべを異にす。梅の侘、桜の興も、折にふれ時にたがへば、句も又人を驚しむ。猶其しげき林に入て、花のかのきよきにつき、いろこき木の葉をひろひて、左右にわかちて、積て四節となす。判士よたりに乞て、我も其一にしたがふ。まことや、楽にゑらるゝものゝ笛をぬすむに似たり、といはむ。されども、青鷺の目をぬひ、あふむの口を戸ざゝむことあたはず。貞享うのとし、筆を江上の潮にそゝぎて、つるに蕉庵雪夜のともし火に対す。桃青書

〈現代語訳〉

一柳軒不卜の主は、身を俗世間に置き、その習いに従つてはいても、志は雲のかかる山の岩根をたどるように、高い境地をめざしており、ある時は笈の重みに耐えつつ吉野の花に遊び、ある時は琵琶湖に舟を浮かべて月に琵琶を弾じるなど、風雅の奴として長年を過ごしてきた。これまでに集を出すことが二度あったとはいえ、それも昔時のことで、その間に万物は変化し、淵明が詩に詠んだ菊も、唐朝の人々に愛された牡丹も、名や姿をさまざまに違えている。梅や桜の興趣として時節に応じて変わるもの、句もまた新しい見方を示したものは、人を驚嘆させることになる。編者は俳諧という名の林に猶も入り込み、余情と表現力に富んだ句を拾い出し、左右に分けて句合とし、四季それぞれにまとめた。判士を四人に依頼し、私もその一人として列に連なっている。まったく、故事にいう「楽に選らるる者の笛を盗むにたり」とはこのこと。しかしながら、青鷺の目を縫い、鸚鵡の口を閉ざすことができないように、具眼の論者にはすべてお見通しで、批判は免れないであろう。

貞享丁卯の年、筆を河畔の潮に洗い、雪の夜の芭蕉庵で灯火に向かう。

桃青書

* 「一柳軒不卜」は『続の原』の編者である岡村不卜。「風雅のやつこ」は、風雅に取り憑かれ俳諧に専心する者の意であろう。「集頭す事ふたゝび」は、不卜が延宝六年に『江戸広小路』、同八年に『俳諧向之岡』を刊行したこと。「雲ゆき雨ほどこして」は『易経』の「雲行キ雨施シテ品物形ヲ流ス」を踏まえ、万事は変わることをいう。「東籬の菊」は陶淵明「飲酒」の「菊ヲ採ル東籬ノ下」を踏まえる。「唐朝の牡丹」は周茂叔「愛蓮説」に「李唐ヨリコノカタ世

人甚ダ牡丹ヲ愛ス」とあるように、中国人が好んだ牡丹の意。江戸時代は園芸が流行し、品種改良による菊・牡丹などの新種も多く生まれた。「梅の侘、桜の興も、折にふれ時にたがへば、句も又人を驚しむ」は、そのことを踏まえ、梅・桜の興趣も時節に応じて変わるのだから、句も改良を重ねることで人を驚嘆させうる、ということか。あるいは、不卜の句や不卜の選んだ句がすでに時流を越えている、と賞賛したものか。「花のかのきよきにつき、いろこき木の葉をひろひて」は、すぐれた作品を選んだということ、色」は表現、「香」は余情をいうか。「判士よたり」は本書の句合に判を施した素堂・調和・湖春・桃青の四人。「楽にゑらるゝものゝ笛をぬすむ」は、斉の宣王が三百人の楽士に笛を吹かせた際に、実力のない南郭は中にまぎれてごまかしたという、「南郭濫吹」の故事（『韓非子』）により、判士をする力のない自分がまじっていることをいう謙遜の辞。「青鷺の目をぬひ、あふむの口を戸さゝむことあたはず」は、よく見える青鷺の目をふさぎ、よくしゃべる鸚鵡の口を閉ざすことはできない、ということ、具眼の読者、論の立つ読者を想定したものである。「貞享うのとし」は貞享四年。「江上の潮に」は隅田川のほとりにさして来る潮で、芭蕉句に「名月や門に指くる潮頭」（『芭蕉庵三ヶ月日記』）がある。